

## in play の哲学 その2 パッシングショット

一か八かのストレートは邪念の塊・・・あれほど言ったのだが、それでもストレートに打ち込みたいようだ。選択肢からストレートを除外し、in play 中に「考える」ストレスを減らそうとすることが、かえって欲求不満のストレスを生むというパラドックス。なんと皮肉であることか。それならば、打とう。ただし、その前に・・・

ダブルス。down the line のパッシングショット。後衛が相手前衛の逆をついて、ストレートに打ち込むプレーについて考えてみる。

雁行陣は、後衛のクロスの打ち合いが基本。そこに前衛がポーチに飛び出して得点するのが、一つのオーソドックスなパターンである。このパターンで、“スター”はあくまでもボレーでエースを決める前衛。後衛はそのお膳立てをするのが仕事だ。だから、ストロークでねじ伏せようなどとは絶対に考えてはならない。「**後衛は大活躍してはならない**」というのが最も単純な第1の戒めである。ペアがどんなに慎重で消極的で、なかなかポーチに飛び出してくれなくても、彼の勇氣と決断をただひたすら信じるのだ。ペアを信じられず、自分だけで何とかしようとする邪念がストレスを生み、無理を誘い、ミスを招く。後衛をやっている間は、“スター”への道を、とりあえず諦めてくれ。

さて、後衛がクロスに徹していると、相手前衛はポーチに来る。来ない前衛もいるけれど、そういう前衛の時は、“無心に”クロスを打ち続けるだけでいい。「こんなことを続けてたら、きっとオレが先にミスる」という強迫観念（邪念）が頭をもたげることもあるけれど、大丈夫だ、お前の前衛は必ず何とかしてくれるから。イヤなのは、ポーチに来る前衛である。来るヤツはホントに鬱陶しいほど来る。放っておいたら、つけあがって、センターストラップを通り越して飛び出してくる。しかし彼はホントは「つけあがって」いるのではなく、ポーチしてやろうと「うずうず」しているのだ。だから、まず、その飛び出しを止めなければならない。ポーチしてやろうという意欲を萎えさせてやらなくちゃならない。ポーチしてやろうと「うずうず」しているヤツは、同時に、ポーチ出来なくて「イライラ」している。ポーチのことしか考えられなくなっているのだ。つまり、ストレートはガラ空き。その時こそ、ストレートだ。passing という英語の響きは、我慢に我慢を重ね、やっと相手のストレートがガラ空きになることを見切ったお前のラケットがボールをひっぱたく時の音そのものじゃないか！その時まで、ストレートはやっぱり封印なのだ。だってそうじゃないか。そんなにしょっちゅうストレートを打つ後衛に対しては、相手の前衛だって、警戒してくるのは当たり前なのだ。ということで、二つ目の戒めは「**相手前衛のポーチの動きが邪魔くさいときにだけ、その動きを止める目的でストレートに行け**」この戒めが「点数が欲しくてストレートに打ち込むスケベ根性（邪念）は、失点しかもたらさない」ということの裏返しであるのは言うまでもない。